

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0471200394		
法人名	有限会社 さくら		
事業所名	グループホーム さくら	ユニット名	A棟
所在地	宮城県登米市南方町鴻の木146-3		
自己評価作成日	平成 21年10月5日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

2ヶ月に1度の全体会議の際に、協力医であるみなみかた歯科の先生を講師に招き、口腔ケアの勉強会を行った。摂食障害・嚥下障害のリハビリテーションや、入れ歯の手入れ方法、歯磨きの手順など2度に渡って勉強会を開くことが出来、先生に気軽に相談できる関係ができ、結果車椅子の方で心臓に疾患がある方でも入れ歯を作り替える事ができ、食べる楽しみができ、咀嚼もできるようになり誤嚥性の肺炎防止になった。 終末期が近づいた方には、主治医や家族を含めて何度も話し合いを持ち、できる限り家族の意向に添ったケアをしている。 昨年は、家族の希望により3人の方を看取った経験があり、現在も1人の方の看取りを行っている。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://yell.hello-net.info/kouhyou/">http://yell.hello-net.info/kouhyou/</a>
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「誠意を持って安全と安心を提供できる知識と技術を持つ」の言葉を会社目標に掲げて「グループホームさくら」は運営されている。この言葉を根幹にして、運営者はより良いケアのための研修を積極的に行ない、地域の中で入居者・家族が満足できる暮らしとサービスの提供に努めている。年間行事計画のほか、入居者の要望などに対応して随時の外出が入居者を喜ばせている。施設内には穏かな雰囲気の流れ、入居者にとって「自分の家」として居心地の良い場所であることが家族のアンケートからもうかがえる。尚、口腔ケアを重視している事を評価したい。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会		
所在地	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-2-8 テルウェル仙台ビル2階		
訪問調査日	平成21年10月20日		

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

2.自己評価および外部評価結果(詳細)(事業所名 グループホーム さくら )「ユニット名 A棟 」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	新年度に向けて社内標語を募集し、全スタッフから2~3つの標語があげられた。『地域一番の笑顔…アットホームな和み…グループホームさくら』が選ばれ各棟に掲示し常に念頭において介護している。	課題であった「独自の理念」づくりに取り組んだのは、職員各自の標語づくりであった。その結果、ホームの理念に相応しい「入居者の笑顔を引き出すケア」と「家庭的な関係性の構築」を表現する言葉をスローガンとした。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会に加入しており、区長さんが広報誌など届けて下さり、地域行事に参加している。また、道路に面したフェンスに朝顔を植えたところ、近所の子供が朝顔を摘みに来たりと、日常的な光景が見られる。地区の	市主催行事(敬老会、夏祭り、文化祭)、和太鼓発表会参観、演芸ボランティア訪問、中学生体験学習受け入れなど交流がある。ホーム主催の夏祭りには地域住民が200人参加するなど地域との関係を深めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	なかなか実践とまでは行かないが、前回より福祉推進委員の方にも推進会議に参加してもらい、是非ホームの持っている力を利用してもらえるよう働きかけた。夏祭りには老人会や婦人会の方に来て頂き一緒に過		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議で出た意見として、区長や民生員だけでなく、福祉推進委員がいるので、声を掛けてみるよう意見があり早速参加を求めたところ、8月の推進会議から参加して頂いた。	会議では、生活状況報告に続く委員のやり取りで進行している。夏祭りでの地域協力体制は、委員の意見が反映されたものである。自由な意見交換はホームの範囲外にも及び多様な連携を生み出す元になっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議には必ず参加して頂いており、その都度現場の実情を伝え、お互いに考えや実態を共有し、サービスの質の向上に取り組んでいる。	市の担当課からは、高齢者介護に関する情報の提供や時局に対応する行政助言などの提供もある。また、運営推進会議委員として意見表明や協力をいただいている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関は常に開放されており、自由に入出入り出来る状態である。スピーチロックなどを含め常に身体拘束をしないケアに努めている。	「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」について職員はよく理解している。入居者の生活傾向を十分に把握して、寄り添って信頼し合うなど拘束しないケアの工夫を実施している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修会に参加し、その資料や報告書を全スタッフに回覧している。また虐待の種類などについても勉強会などで周知徹底し、虐待が見過ごしたり、行われることのないように心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	以前後見人制度を利用したことがあり、各職員が理解できている。また、人権擁護に関する研修会に参加し、会議の際に発表してもらい、またその報告書を回覧している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、重要事項説明書や契約書の内容を十分に説明し、疑問や質問に答え十分に理解をいただいた上で契約を結んでいる。退所の際には次の施設や病院を紹介し継続して介護が受けられるように支援している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族より苦情や不満など気軽に出して頂けるように、玄関先に駆除糞子を設置している。面会時には家族さんが気軽に話せる雰囲気を作り要望を速やかに聞き入れる様にしている。	玄関への苦情箱の設置や第三者委員(2名)を置くなど、意見の表出しやすい環境づくりをしている。また、家族の来訪時には入居者の生活状況を伝えながら、話しやすい雰囲気づくりに努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	棟ミーティングで話し合われたことや、行事の企画、などその都度相談し検討している。2ヶ月に1度開催される全体会議の際には、直接経営者に話す機会がある。	入居者のケアや活動について、常に職員の意見を求めている。運営に関しても、楽しみのあるより良い生活状況を維持するために行事への特別予算を確保するなど職員の意見が反映されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の希望する休みをなるべく聞き入れるようにシフトを組んでおり、介護休暇なども設け職場に復帰しやすい環境を整えている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	様々な研修会や勉強会にまんべんなく参加してもらい、スキルアップ出来るようにしており、今年は介護福祉士の受験者が3人いる。全体会議ではもちろん棟ミーティングでも勉強しレベルアップを図っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム協会に参加し、勉強会や施設見学はもちろん、交換研修を行い相互の質の向上に努めている。特に市内のグループホームとは綿密な連携がとれている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前には必ず居宅のケアマネージャーと管理者ホームのケアマネージャーとで自宅などに赴き、実態調査を行う。本人の状況を知りながら馴染みの関係を作り、安心してもらうよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	実態調査時に、今家族が困っていることをしっかりと聴き、受け止め信頼関係を作られるよう努力している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	最初の相談を受けたとき、本人及び家族の主要ニーズを聞き、グループホームよりも適切なサービスがある場合にはそちらのサービスを紹介し、具体的な施設を紹介することもある。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	出来ることまで支援するのではなく、台所や洗濯物干しなど一緒に行くことにより、共に学び、支え合える関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	受診の帰りに自宅に寄ってきたり、盆正月などは自由に帰省し家族とのつながりを保っている。月に1度の族報告にて本人の状況、通院時の報告など行い情報の共有を図っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	地域の小さな行事などにもできる限り参加する事で、馴染みのある方から声を掛けてもらったり、受診時にも思いがけなく知り合いに会うことで、関わりが継続している。	職員は、入居者のこれまでの社会参加状況や交際状況について把握しており、入居者の要望に応じて墓参や馴染みの理容室に同行している。友人、元隣人の訪問の際は気兼ねなくつろげるように支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	お互い意識し合い、助け合っている姿が色々な場面で見受けられる。仲の良い方は一緒にお風呂に入ることもある。行事や書道など趣味活動を通してA棟B棟の交流を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	老人ホームに移った方の面会に行き、スタッフとの情報交換をし本人の要望を伝え、家族の状況なども伝えフォローを行っている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	普段の会話から本人の情報をより細かく知り、出来るだけ希望が実現できるよう支援している。モニタリングなどの結果もミーティング時にスタッフに伝え周知している。	入居者の表情や雰囲気気に気を配り、少しの変化も見逃さないようにしている。入居者のだれもが言いたい事が言えるように普段のコミュニケーションと信頼できる関係づくりを大切にしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用前に家族からの調査だけでなく、ケアマネからも細かい情報を得ている。また、面会時に家族と話すことで、又違った事を知り得ることもあり、常に情報を得よう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	違った角度から支援することで出来ることがあったり、出来ないからと決めつけずスタッフの観察力を養っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアマネージャーが本人との聞き取りの中で思いを聞き取り、できる限り本人の意向に添えるよう、家族や主治医と話し合い検討している。	入居者ごとの「生活援助計画」には、ニーズや解決すべき課題、どうなりたいか等が記録されている。3ヶ月に一度、それらを評価し、関係者の意見を加えて見直しを検討される。変化による見直しは随時行なわれている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	普段の会話や介護の中で気づいたことなど、わかりやすく記し、職員間で共通の認識としてとらえ、一貫したケアができるようにしている。ミーティング時にはそれらを話し合いケアプランの見直しに役立っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族との外出支援や、通院など随時対応し、日常の様子であったり、外出時の注意点など家族に伝えている。職員の移動なども極力控えると共に、両棟のスタッフとも馴染みの関係を築いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ボランティアで習字を教えている方がおり、介護5の方であっても習字を楽しみにして待っている。避難訓練に於いては、運営推進会議の日に設定し民生委員や区長などの参加で実施している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	内科はもちろんのこと、本人や家族の希望する病院に通院することで、より詳しい既往歴であったり、緊急時の対応など医師との信頼関係を保っている。	入居前からのかかりつけ医を継続して受診することができている。通院には職員が同行して生活の様子を説明している。家族への連絡は受診の前後に行ない、情報を伝達し、記録している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	協力医のサンクリニックの協力がああり、いち早く看護師がホームに駆けつけ状態を診て即対応してくれている。職員も気軽に質問することが出来るので不安なくケアできる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院前の状態など医師や看護婦に詳しく伝え、短期間で退院できるよう病院側と話し合っている。家族まかせではなく、馴染みの職員が見舞いに行くことで、不安などのストレスを解消出来るよう努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	家族全員から看取りケアについての承諾書を頂いている。また、終末期が近づいた時には、主治医と家族を含めて協議し、できる限り家族の意向を尊重して支援の方向を決めている。	入居時、「終末期の基本的な考え方」を説明する。入居後の変化に応じて関係者で話し合いを持ち、「ターミナルケアにおける確認事項」を提示する。この確認事項は、具体的なケアの細部に触れて入居者・家族が希望する内容を選択できるものになっている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	ホーム独自のマニュアルがあり、勉強会などで実践的に行っている。全員普通救命講習を受講しており、ホームにもAEDが設置してある。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2度以上の避難訓練を実施している。また運営推進会議に合わせ訓練を実施し、地域の方の協力を得ている。	マニュアルを作成し、役割分担表に沿って避難訓練を行なった。11月に予定している夜間想定は今年度3度目の訓練となる。水や食糧、ケア用品等の備蓄もある。運営推進委員と地域住民の具体的参加を考えている	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者のプライドやプライバシーには特に配慮し、本人が恥ずかしい思いをしないよう、言葉遣いはもちろん、声のトーンなど気を付けている。面会表も以前は一覧表にしていたが、個人情報保護と言うことで一覧表にはせず、事務所管理している。	入居者が呼ばれたい名前と呼んだり、入居者が失敗しても傷付けないよう配慮した言葉掛けに努めている。その声音は優しく穏やかであった。入居者の持てる力や誇りなどを尊重することを大切にしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日頃の会話から本人がどのような思いを持っているのかを聞き取り、出来ることはすぐに実現できるようにしている。買い物なども一緒に行くことで自分の好きな物を選び購入できるよう支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その日のしたいことなど利用者から希望を取りながら過ごしている。高齢によりリズムが狂いがちな方であっても、その方のペースを尊重し支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	馴染みの美容室に行く人もおり、ホームの向かいの理美容店に通うことで顔なじみとなっている。化粧をしている方には洗顔などの方法も支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は利用者にとって一つの楽しみとなっているので、旬の食材やメニューなどふんだんに取り入れている。畑と一緒に収穫した野菜はもちろんおにぎりなど自分で作った物を食べる喜びを楽しんでいる。	買い物と一緒に掛けて、好みの食材をメニューに取り入れている。伝統的な行事食や季節食などは入居者の大きな楽しみとなっている。栄養バランスについては年に2回、栄養士のチェックを受けている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	既往歴や医師の指示のもと、塩分やカロリーなど個人ごとに把握できるよう記録している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	起床時や就寝前には歯磨きや、入れ歯の手入れを行っている。また、歯科医を招き口腔ケアの勉強会など行い、実践している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄パターンを把握、記録することで、トイレ誘導のタイミングを図り失敗を少なくし快適な排泄が出来るよう支援している。また、パットも個人に合わせ他種類を用意している。	入居者一人ひとりの排泄をチェック表にまとめ、水分の摂取などに活かしている。現在のところ、全入居者の自立排泄が可能である。リハビリ体操などを行い、筋力の低下を遅らせて自立の継続に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘予防として、乳製品の窃取や運動、散歩など取り入れている。個人の排泄チェックにて便秘の有無を確認している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	血圧を確認し、健康状態を把握した上で、入浴をしてもらっている。仲良しの利用者同士一緒に入浴することもある。	入浴意欲の有無から確認し、無理強いはないが入浴を嫌がる入居者はいない。午前と午後の希望する時間に入浴し、入居者自身のペースを楽しんでいる。菖蒲湯などで季節を楽しむこともある。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	高齢の方など特に、傾眠状態の強く見られるときには、昼夜問わずゆっくり休んでもらっている。各部屋には床暖やエアコンが設置しており、健康状態や好みにて温度調整し快適な睡眠が取れるように配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々の病気と服薬内容を記載しており、スタッフは一人ひとりの薬について理解している。また、変更になって時には習知を徹底し、状態の変化について報告するようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	畑仕事、食事の下準備、片づけや掃除など、一人ひとりの出来る範囲で役割を持ち、生活に張り合いを持ってもらえるようにしている。書道やドライブなど気分転換を図る場を持ち日常生活を楽しんでもらえるように支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	買い物などの要求があれば、一緒に行って購入したりしている。また地域のお祭りや行事などにも積極的に参加している。お盆やお彼岸などにも、家族の協力をもらいお墓参りなどに行っている。夏には、花火を見せたいという家族の要望があり、車中より見ることが出来た。	日常的な散歩に始まり、景勝地やテレビ・新聞のニュースで関心のある場所を見つけてドライブすることがよくある。馴染みの理容室に通い、入居者の実家を見に行ったり、知己の墓参りに行くこともある。家族のアンケートからもよく出掛けていることがうかがえた。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を自分で管理できる方には各自所持し、日用品や趣向品など購入している。購入の際はスタッフが付き添い、買い物をしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	遠くの家族から贈り物などがあつたときには必ず電話を入れたり、最近の写真と同封して手紙を送ったりしている。本人の希望時には電話をかけ面会要請などの支援をしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビングには利用者とスタッフの作った四季折々の飾り付けがされ、季節感を感じてもらえるよう工夫している。	敷地内に、建物が囲むエントランス広場があり、木製ベンチとテーブルで茶飲みすることもあるという。傍らには入居者の経験が活かされる畑がある。建物内は床暖房と自然換気でこまやかな管理がされている。入居者の作品掲示や行事写真で季節感を出している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	和室やリビングのソファーには、気のあつた利用者同士が座り、語り合ったりテレビを見たりしてゆっくりと過ごしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人が自宅で使っていた家具や物を居室に置き使用することで、安心して心地よく生活してもらっている。	ベッドはホーム備え付けとなっているが、チェストやテレビなどは入居者の馴染みのものが置かれている。居室の出入り口は開放的な雰囲気、ホームが「我が家」となっていることの居心地の良さを表わしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	洗濯物なども利用者が干したり、たたんだりという出来ることは自分ですするという流れが出来ている。物干しも自由に使えるよう低めの物を使用している。		

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0471200394		
法人名	有限会社 さくら		
事業所名	グループホーム さくら	ユニット名	B棟
所在地	宮城県登米市南方町鴻の木146-3		
自己評価作成日	平成 21年10月5日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

2ヶ月に1度の全体会議の際に、協力医であるみなみかた歯科の先生を講師に招き、口腔ケアの勉強会を行った。摂食障害・嚥下障害のリハビリテーションや、入れ歯の手入れ方法、歯磨きの手順など2度に渡って勉強会を開くことが出来、先生に気軽に相談できる関係ができ、結果車椅子の方で心臓に疾患がある方でも入れ歯を作り替える事ができ、食べる楽しみができ、咀嚼もできるようになり誤嚥性の肺炎防止になった。 終末期が近づいた方には、主治医や家族を含めて何度も話し合いを持ち、できる限り家族の意向に添ったケアをしている。 昨年は、家族の希望により3人の方を看取った経験があり、現在も1人の方の看取りを行っている。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://yell.hello-net.info/kouhyou/">http://yell.hello-net.info/kouhyou/</a>
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「誠意を持って安全と安心を提供できる知識と技術を持つ」の言葉を会社目標に掲げて「グループホームさくら」は運営されている。この言葉を根幹にして、運営者はより良いケアのための研修を積極的に行ない、地域の中で入居者・家族が満足できる暮らしとサービスの提供に努めている。年間行事計画のほか、入居者の要望などに対応して随時の外出が入居者を喜ばせている。施設内には穏かな雰囲気の流れ、入居者にとって「自分の家」として居心地の良い場所であることが家族のアンケートからもうかがえる。尚、口腔ケアを重視している事を評価したい。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人 介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民の会		
所在地	宮城県仙台市宮城野区榴岡4-2-8 テルウェル仙台ビル2階		
訪問調査日	平成21年10月20日		

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

2.自己評価および外部評価結果(詳細)(事業所名 グループホーム さくら )「ユニット名 B棟 」

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	新年度に向けて社内標語を募集し、全スタッフから2~3つの標語があげられた。『地域一番の笑顔…アットホームな和み…グループホームさくら』が選ばれ各棟に掲示し常に念頭において介護している。	課題であった「独自の理念」づくりに取り組んだのは、職員各自の標語づくりであった。その結果、ホームの理念に相応しい「入居者の笑顔を引き出すケア」と「家庭的な関係性の構築」を表現する言葉をスローガンとした。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会に加入しており、区長さんが広報誌など届けて下さり、地域行事に参加している。地区の敬老会に1人参加する。	市主催行事(敬老会、夏祭り、文化祭)、和太鼓発表会参観、演芸ボランティア訪問、中学生体験学習受け入れなど交流がある。ホーム主催の夏祭りには地域住民が200人参加するなど地域との関係を深めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	なかなか実践とまでは行かないが、前回より福祉推進委員の方にも推進会議に参加してもらい、是非ホームの持っている力を利用してもらえるよう働きかけた。夏祭りには老人会や婦人会の方に来て頂き一緒に過		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議で出た意見として、区長や民生員だけでなく、福祉推進委員がいるので、声を掛けてみるよう意見があり早速参加を求めたところ、8月の推進会議から参加して頂いた。	会議では、生活状況報告に続く委員のやり取りで進行している。夏祭りでの地域協力体制は、委員の意見が反映されたものである。自由な意見交換はホームの範囲外にも及び多様な連携を生み出す元になっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議には必ず参加して頂いており、その都度現場の実情を伝え、お互いに考えや実態を共有し、サービスの質の向上に取り組んでいる。	市の担当課からは、高齢者介護に関する情報の提供や時局に対応する行政助言などの提供もある。また、運営推進会議委員として意見表明や協力をいただいている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関は常に開放されており、自由に入出入り出来る状態である。スピーチロックなどを含め常に身体拘束をしないケアに努めている。	「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」について職員はよく理解している。入居者の生活傾向を十分に把握して、寄り添って信頼し合うなど拘束しないケアの工夫を実施している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修会に参加し、その資料や報告書を全スタッフに回覧している。また虐待の種類などについても勉強会などで周知徹底し、虐待が見過ごしたり、行われることのないように心がけている。		

自己	外部	項目	外部評価	
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	以前後見人制度を利用したことがあり、各職員が理解できている。現在も一人の家族さんに話しをしているところである。また、人権擁護に関する研修会に参加し、会議の際に発表してもらい、またその報告書を回覧している	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、重要事項説明書や契約書の内容を十分に説明し、疑問や質問に答え十分に理解をいただいた上で契約を結んでいる。退所の際には次の施設や病院を紹介し継続して介護が受けられるように支援している	
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族より苦情や不満など気軽に出して頂けるように、玄関先に駆除糞子を設置している。面会時には家族さんが気軽に話せる雰囲気を作り要望を速やかに聞き入れる様にしている。	玄関への苦情箱の設置や第三者委員(2名)を置くなど、意見の表出しやすい環境づくりをしている。また、家族の来訪時には入居者の生活状況を伝えながら、話しやすい雰囲気づくりに努めている。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	棟ミーティングで話し合われたことや、行事の企画、などその都度相談し検討している。2ヶ月に1度開催される全体会議の際には、直接経営者に話す機会がある。	入居者のケアや活動について、常に職員の意見を求めている。運営に関しても、楽しみのあるより良い生活状況を維持するために行事への特別予算を確保するなど職員の意見が反映されている。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の希望する休みをなるべく聞き入れるようにシフトを組んでおり、介護休暇なども設け職場に復帰しやすい環境を整えている。	
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	様々な研修会や勉強会にまんべんなく参加してもらい、スキルアップ出来るようにしており、今年は介護福祉士の受験者が2人いる。全体会議ではもちろん棟ミーティングでも勉強しレベルアップを図っている。	
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム協会に参加し、勉強会や施設見学はもちろん、交換研修を行い相互の質の向上に努めている。特に市内のグループホームとは綿密な連携がとれている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前には必ず居宅のケアマネジャーと管理者ホームのケアマネジャーとで自宅などに赴き、実態調査を行う。本人の状況を知りながら馴染みの関係を作り、安心してもらうよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	実態調査時に、今家族が困っていることをしっかりと聴き、受け止め信頼関係を作られるよう努力している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	最初の相談を受けたとき、本人及び家族の主要ニーズを聞き、グループホームよりも適切なサービスがある場合にはそちらのサービスを紹介し、具体的な施設を紹介することもある。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	出来ることまで支援するのではなく、台所や洗濯物干しなど一緒に行くことにより、共に学び、支え合える関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	受診の帰りに自宅に寄ってきたり、盆正月などは自由に帰省し家族とのつながりを保っている。月に1度の族報告にて本人の状況、通院時の報告など行い情報の共有を図っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	地域の小さな行事などにもできる限り参加する事で、馴染みのある方から声を掛けてもらったり、受診時にも思いがけなく知り合いに会うことで、関わりが継続している。	職員は、入居者のこれまでの社会参加状況や交際状況について把握しており、入居者の要望に応じて墓参や馴染みの理容室に同行している。友人、元隣人の訪問の際は気兼ねなくつろげるように支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	お互い意識し合い、助け合っている姿が色々な場面で見受けられる。仲の良い方は一緒にお風呂に入ることもある。行事や書道など趣味活動を通してA棟B棟の交流を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	老人ホームに移った方の面会に行き、スタッフとの情報交換をし本人の要望を伝え、家族の状況なども伝えフォローを行っている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	普段の会話から本人の情報をより細かく知り、出来るだけ希望が実現できるよう支援している。モニタリングなどの結果もミーティング時にスタッフに伝え周知している。	入居者の表情や雰囲気気に気を配り、少しの変化も見逃さないようにしている。入居者のだれもが言いたい事が言えるように普段のコミュニケーションと信頼できる関係づくりを大切にしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用前に家族からの調査だけでなく、ケアマネからも細かい情報を得ている。また、面会時に家族と話すことで、又違った事を知り得ることもあり、常に情報を得よう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	違った角度から支援することで出来ることがあったり、出来ないからと決めつけずスタッフの観察力を養っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアマネージャーが本人との聞き取りの中で思いを聞き取り、できる限り本人の意向に添えるよう、家族や主治医と話し合い検討している。	入居者ごとの「生活援助計画」には、ニーズや解決すべき課題、どうなりたいか等が記録されている。3ヶ月に一度、それらを評価し、関係者の意見を加えて見直しを検討される。変化による見直しは随時行なわれている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	普段の会話や介護の中で気づいたことなど、わかりやすく記し、職員間で共通の認識としてとらえ、一貫したケアができるようにしている。ミーティング時にはそれらを話し合いケアプランの見直しに役立っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族との外出支援や、通院など随時対応し、日常の様子であったり、外出時の注意点など家族に伝えている。職員の移動なども極力控えると共に、両棟のスタッフとも馴染みの関係を築いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ボランティアで習字を教えている方がおり、認知症が進行しても習字を楽しみにして待っている。避難訓練に於いては、運営推進会議の日に設定し民生委員や区長などの参加で実施している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	内科はもちろんのこと、本人や家族の希望する病院に通院することで、より詳しい既往歴であったり、緊急時の対応など医師との信頼関係を保っている。	入居前からのかかりつけ医を継続して受診することができている。通院には職員が同行して生活の様子を説明している。家族への連絡は受診の前後に行ない、情報を伝達し、記録している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	協力医のサンクリニックの協力がああり、いち早く看護師がホームに駆けつけ状態を診て即対応してくれている。職員も気軽に質問することが出来るので不安なくケアできる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院前の状態など医師や看護婦に詳しく伝え、短期間で退院できるよう病院側と話し合っている。家族まかせではなく、馴染みの職員が見舞いに行くことで、不安などのストレスを解消出来るよう努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	家族全員から看取りケアについての承諾書を頂いている。また、終末期が近づいた時には、主治医と家族を含めて協議し、できる限り家族の意向を尊重して支援の方向を決めている。	入居時、「終末期の基本的な考え方」を説明する。入居後の変化に応じて関係者で話し合いを持ち、「ターミナルケアにおける確認事項」を提示する。この確認事項は、具体的なケアの細部に触れて入居者・家族が希望する内容を選択できるものになっている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	ホーム独自のマニュアルがあり、勉強会などで実践的に行っている。全員普通救命講習を受講しており、ホームにもAEDが設置してある。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2度以上の避難訓練を実施している。また運営推進会議に合わせ訓練を実施し、地域の方の協力を得ている。	マニュアルを作成し、役割分担表に沿って避難訓練を行なった。11月に予定している夜間想定は今年度3度目の訓練となる。水や食糧、ケア用品等の備蓄もある。運営推進委員と地域住民の具体的参加を考えている	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者のプライドやプライバシーには特に配慮し、本人が恥ずかしい思いをしないよう、言葉遣いはもちろん、声のトーンなど気を付けている。面会表も以前は一覧表にしていたが、個人情報保護と言うことで一覧表にはせず、事務所管理している。	入居者が呼ばれたい名前と呼んだり、入居者が失敗しても傷付けないよう配慮した言葉掛けに努めている。その声音は優しく穏やかであった。入居者の持てる力や誇りなどを尊重することを大切にしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日頃の会話から本人がどのような思いを持っているのかを聞き取り、出来ることはすぐに実現できるようにしている。買い物なども一緒に行くことで自分の好きな物を選び購入できるよう支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その日のしたいことなど利用者から希望を取りながら過ごしている。高齢によりリズムが狂いがちな方であっても、その方のペースを尊重し支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	馴染みの美容室に行く人もおり、ホームの向かいの理美容店に通うことで顔なじみとなっている。化粧をしている方には洗顔などの方法も支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は利用者にとって一つの楽しみとなっているので、旬の食材やメニューなどふんだんに取り入れている。畑と一緒に収穫した野菜はもちろんおにぎりなど自分で作った物を食べる喜びを楽しんでいる。	買い物と一緒に掛けて、好みの食材をメニューに取り入れている。伝統的な行事食や季節食などは入居者の大きな楽しみとなっている。栄養バランスについては年に2回、栄養士のチェックを受けている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	既往歴や医師の指示のもと、塩分やカロリーなど個人ごとに把握できるよう記録している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	起床時や就寝前には歯磨きや、入れ歯の手入れを行っている。また、歯科医を招き口腔ケアの勉強会など行い、実践している。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄パターンを把握、記録することで、トイレ誘導のタイミングを図り失敗を少なくし快適な排泄が出来るよう支援している。また、パットも個人に合わせ他種類を用意している。	入居者一人ひとりの排泄をチェック表にまとめ、水分の摂取などに活かしている。現在のところ、全入居者の自立排泄が可能である。リハビリ体操などを行い、筋力の低下を遅らせて自立の継続に努めている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘予防として、乳製品の窃取や運動、散歩など取り入れている。個人の排泄チェックにて便秘の有無を確認している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	血圧を確認し、健康状態を把握した上で、入浴をしてもらっている。仲良しの利用者同士一緒に入浴することもある。	入浴意欲の有無から確認し、無理強いはないが入浴を嫌がる入居者はいない。午前と午後の希望する時間に入浴し、入居者自身のペースを楽しんでいる。菖蒲湯などで季節を楽しむこともある。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	高齢の方など特に、傾眠状態の強く見られるときには、昼夜問わずゆっくり休んでもらっている。各部屋には床暖やエアコンが設置しており、健康状態や好みにて温度調整し快適な睡眠が取れるように配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個々の病気と服薬内容を記載しており、スタッフは一人ひとりの薬について理解している。また、変更になって時には習知を徹底し、状態の変化について報告するようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	畑仕事、食事の下準備、片づけや掃除など、一人ひとりの出来る範囲で役割を持ち、生活に張り合いを持ってもらえるようにしている。書道やドライブなど気分転換を図る場を持ち日常生活を楽しんでもらえるように支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	買い物などの要求があれば、一緒に行って購入したりしている。また地域のお祭りや行事などにも積極的に参加している。お盆やお彼岸などにも、家族の協力をもらいお墓参りなどに行っている。夏には、花火を見せたいという家族の要望があり、車中より見ることが出来た。	日常的な散歩に始まり、景勝地やテレビ・新聞のニュースで関心のある場所を見つけてドライブすることがよくある。馴染みの理容室に通い、入居者の実家を見に行ったり、知己の墓参りに行くこともある。家族のアンケートからもよく出掛けていることがうかがえた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を自分で管理できる方には各自所持し、日用品や趣向品など購入している。購入の際はスタッフが付き添い、買い物をしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	遠くの家族から贈り物などがあつたときには必ず電話を入れたり、最近の写真と同封して手紙を送ったりしている。本人の希望時には電話をかけ面会要請などの支援をしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビングには利用者とスタッフの作った四季折々の飾り付けがされ、季節感を感じてもらえるよう工夫している。	敷地内に、建物が囲むエントランス広場があり、木製ベンチとテーブルで茶飲みすることもあるという。傍らには入居者の経験が活かされる畑がある。建物内は床暖房と自然換気でこまやかな管理がされている。入居者の作品掲示や行事写真で季節感を出している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	和室やリビングのソファーには、気のあつた利用者同士が座り、語り合ったりテレビを見たりしてゆっくりと過ごしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人が自宅で使っていた家具や物を居室に置き使用することで、安心して心地よく生活してもらっている。	ベッドはホーム備え付けとなっているが、チェストやテレビなどは入居者の馴染みのものが置かれている。居室の出入り口は開放的な雰囲気、ホームが「我が家」となっていることの居心地の良さを表わしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	洗濯物なども利用者が干したり、たたんだりという出来ることは自分ですするという流れが出来ている。物干しも自由に使えるよう低めの物を使用している。		